

流れ・配置・反復～クラクフ再訪で見た都市の構造 齊藤 賢人

クラクフに再び降り立ったとき、私は前回とは異なる歩き方をしている自分に気づきました。2023 年は、クラクフ中央駅から旧市街の城壁を抜け、中央広場 (Rynek Główny)、ヤギェウォ大学、ヴァヴェル城へと進み、都市の輪郭をなぞるように歩いていました。しかし 2025 年は、同じ道を歩きながらも、場所ではなくその背後にある意味や構造を確かめるように動いていたのです。



中央広場に出たあと、織物会館 (Sukiennice) の地下博物館へ降りしました。地上では観光客や馬車が行き交い、カフェが並んでいますが、その下には中世の市場の痕跡が広がっています。石畳や通路、交易の記録を目にして、クラクフは単に歴史が残る都市ではなく、過去の機能が形を変えて現在に連続している都市であると分かりました。



さらにヴィエリチカ岩塩坑を訪れたことで、この都市の成り立ちがより明確になりました。地下深くまで続く坑道と巨大な空間を前に、塩が単なる資源ではなく、保存や生命維持を支える価値そのものであったことを実感しました。



クラクフはシルクロードの終点ではありませんが、東西の交易ネットワークの中で文化や技術が流入し、再構成される地点だったのだと思い至りました。オブヴァジャネックのようなパンや、街中で見かけたハルヴァにどこかアジア的な気配を感じたのも、そのせいだと納得しました。

一方で、カジミエシュ地区からヴィスワ川を渡り、ポドグジェのゲット一跡へ向かったとき、私は別の感覚に直面しました。距離としてはわずかですが、そこにはかつて人々の自由が断ち切られた境界が存在していました。広場に残る椅子のモニュメントを見ながら、出来事そのものではなく、その前にあった日常に思いを向けました。そこにいた人々は、私たちと同じように暮らしていた存在であり、その連続の上に歴史が重なっているのだと感じました。



街に戻ると、カティンの碑や歴史的な表示が旧市街の各所に点在しているのが目に入ります。フロリア

ンスカ通りから中央広場へ向かう途中でも、何気なく記憶に触れる機会があります。ここで私は、記憶は「どこに置かれているか」で共有のされ方が変わると理解しました。特定の施設に行かなければ触れられない記憶と、日常の中で自然に目に入る記憶では、その浸透の仕方が全く異なります。

再び中央広場に戻ったとき、私はこの都市に対して抱いていた違和感の正体に気づきました。聖マリア教会や織物会館に囲まれた広場は美しく整っていますが、どこか「完成されすぎている」印象があります。それは、かつて交易の中心だったこの場所が、現在では観光や体験を消費する空間へと変化しているためだと考えられます。



ここで私は文化について一つの理解に至りました。文化は流れの中では生きていますが、流れが止まると展示されるものへと変化します。

しかし、その中で例外的に生き続けているものがあります。それが食です。中央広場近くでオブヴァジャネックを手に取り、街角でハルヴァを口にしたとき、それらが今も作られ、食べられ続けることに気づきました。食文化は保存されるのではなく、繰り返されることで存在し続けるのです。食べるという行為を通じて、過去の人々と同じ経験を共有し、それが未来へと受け継がれていきます。



前回の私は都市を「見る」ことで理解しようとしていましたが、今回の私は都市を通して「考える」ようになっていました。同じクラクフを歩いていても、見えているものは大きく変わっていました。

クラクフは変わっていません。変わったのは私の視点です。

この再訪を通じて、私は文化が成立する条件が「流れ」「配置」「反復」にあることを体感的に理解しました。(さいとう・まさと、会員)

写真 (左上から) 織物会館地下博物館、ヴィエリチカ岩塩坑、ゲット一英雄広場にある椅子のモニュメント (右上から) ヤギェウォ大学、聖マリア教会とフロリアンスカ通り、オブヴァジャネック